

<要旨>

中国語における心理述語使役文の意味と機能
—日本語の感情形容詞表出文との対照を通して—

中国語の使役構文は「主語+caus-mark+動作主+V」を基本構造としている。本発表でいう心理述語使役文とは心理述語を動詞Vに取るタイプの使役文を指す。また、心理述語は具体的に「伤心(悲しい)」「生气(腹が立つ)」などのような感情を表すものを指す。本発表は日本語の感情形容詞表出文と対照しながら、次の考察及び主張を行う：

1. 中国語の心理述語使役文の意味と機能を分析し、類像性の観点からそれと日本語の感情形容詞表出文との相違点を明らかにする。
2. 同時に、一見したところ無関係のように見える両構文は実際には共通点が見られることを指摘し、感情の普遍的側面が言語表現の構造に反映されていると主張する。

日中両言語の使役構文は共に心理述語を動詞の位置に取ることができる。例えば、次の(1)(2)が挙げられる。

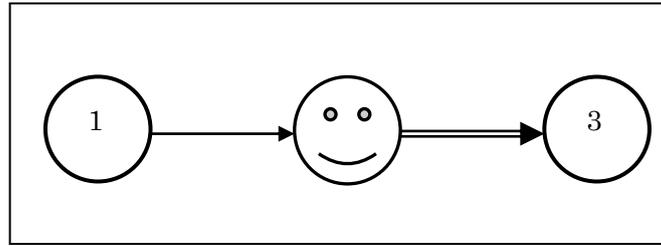
- (1) a. 他的死让世人难过。
b. 彼の死は世間を悲しませた。
- (2) a. 幽灵让人害怕。
b. 幽霊は人を怖がらせる。

しかしながら、日本語の場合、心理述語を取る使役文は(1)bのような客観的な報告や、または(2)bのような一般的な性質に関する描写にしか用いられない。それに対し、中国語の場合は(1)a(2)aの場合のほかに、次の例(3)のように「その場その時」における感情の表出の場合にも用いられる。つまり、中国語の心理述語使役文は感情の表出を捉える機能も持つ。

- (3) 「你 这 满不在乎的 模样 真 让 人 生气!」(『皇城根』)
あなた この・その なんでもない 様子 とても caus 人 腹が立つ
?あなたのそのなんでもない顔が本当に人を腹立たせる!
(あんたのそのなんでもない顔が本当にむかつく!)

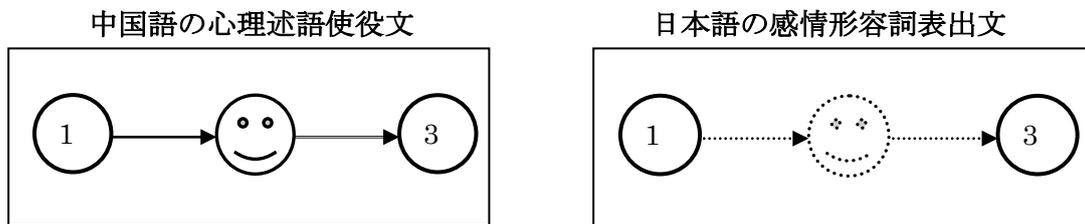
そこで、なぜ感情の表出を捉えるのに中国語では使役文が用いられるのか、またそれと日本語の感情形容詞表出文とどのように異なるのかを見るために、まずは両者が概念化している感情経験そのものの性質を観察することにする。心理学における感情の研究では、感情の生起過程は生物的に規定され、独自の過程を経ていると指摘されている(福田 2003)。これらの指摘に基づき感情の生起過程を簡潔に図式化すると次の通りになる：

- ①：感情対象
- ☺：感情主
- ③：生起した感情
- ：感情対象の働き掛け
- ⇒：感情の生起



<図 1> -感情の生起過程-

図 1 から感情の生起は①→☺→③の順に起きていることが分かる。生起した感情③のみを言語化する場合、日本語では一語文「うれしい!」、中国語では「真高興!」のように表現することができる。しかしながら、感情対象の関与を捉えようとする場合、日本語では「その知らせがうれしい!」のように二重主語文で表現できるが、中国語では二重主語文を用いることができず(木村 2002)、心理述語文使役文を用いなければならない。使役構文の基本機能が外部要因の関与及びそれによる影響を捉える点にあることから、感情の生起過程を概念化する際に、中国語は感情対象の働きかけ及びそれと感情の生起との因果関係を重視していることが分かる。一方日本語の場合、感情対象を明示した感情形容詞表出文は同様に感情の生起の順序に従って感情経験を概念化しているが、中国語と異なり、感情対象の感情主に対する働きかけ及び感情主の主体性を言語化せず、感情対象に対しどのような感情が起きたかだけに注目している。両者の概念化過程を以下のように図式化できる:



<図 2> -感情の生起における概念化の過程-
(感情対象を明示する場合)

本発表は以上に述べた両構文の違いについて:

- 中国語の心理述語使役文は感情の生起過程における各要素の関与及び互いの生起順序・関係を如実に反映しており、感情経験と心理述語使役文との間に類像的な対応が見られる。中国語はしばしば類像性的性質の強い言語と指摘されている(中川 1997)が、心理述語使役文はその典型的な表れであると考えられる。
- 日本語の場合、出来事(この場合感情経験)が自ら起きる、いわゆる「なる」的性質(池上 1981、寺村 1976)が強く、感情生起過程においてできるだけ感情対象の働きかけと感情主の主体性を弱め概念化を行っている。

一方、両構文には次のような共通点も見られる:

- ① より主観的・直接的な表出を表す際に、感情対象がゼロ化する
(4) 「あ、うれしい~」

(5) 「∅ 真 叫 人 着急！」(北)

とても caus 人 焦る/苛々する

?本当に人を苛々させる！

(全くいらいらする！)

② 一人称話者に限定される

以上の特徴について日本語の場合は既に指摘されている(西尾 1972、大曾 2001)が、中国語の心理述語使役文にもそのような特徴がみられるのは興味深い。まず、使役文でありながら使役手の役割を担う主語がゼロ化できることはまれである。また、(5)について感情主の位置を据えているのは名詞「人」であるが、この場合話者一人称に限定されており、三人称に置き換えられない。

(6) *「真叫他着急！」

彼

本発表は、これらの共通点が感情の人間に共通する性質に起因しており、感情の普遍的側面が言語表現の構造に関して重要な影響を与えていることを主張する。

<主な参考文献>

Tai, James H.-Y. (1985) Temporal sequence and Chinese word order, *Iconicity in Syntax*, John Benjamins

Miyake, Takayuki (2004) A Usage-Based Analysis of the Causative Verb *shi* in Mandarin Chinese. *Linguistic studies I*, 7-25. Tokyo University of Foreign Studies

池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店

大河内康憲 (1997) 『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版

(1997) 『中国語の諸相』白帝社

大曾美恵子 (2001) 「感情を表す動詞・形容詞に関する考察」『言語文化論集 22 巻 2 号』名古屋大学

大堀俊夫 (1991) 「文法構造の類像性—かたちの言語学へ」『記号学研究』No. 11 日本記号学会

北山 忍 (1998) 『自己と感情—文化心学による問いかけ—』南條光章

木村 英樹 (2000) 「中国語ヴォイスの構造化とカテゴリー化」『中国語学 247』中国語学会

(2002) 「中国語二重主語文の意味と構造」『認知言語学 I : 事象構造』東京大学出版会

(2003) 「中国語のヴォイス」『日本語学』明治書院

中川正之 (1997) 「類型論からみた中国語・日本語・英語」『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版

西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味、用法の記述的研究』秀英出版

東郷 雄二 (1995) 「言語ははたして恣意的か—言語の類像性と有縁性の問題をめぐって」*Motivation et iconicite* 特集

寺村秀夫 (1973) 「感情表現のシンタクス—「高次の文」による分析の一例」『月刊言語』2 巻 2 号

(1976) 「『ナル』表現と『スル』表現—日英『態』表現の比較—」『国語シリーズ別冊 4 日本語と日本語教育—文字・表現編—』国語国立研究所

福田正治 (2003) 『感情を知る』ナカニシヤ出版

用例出典：

『皇城根』陳建功 山西教育出版社 1998

北京大学漢語語言学研究センター語料庫：<http://ccl.pku.edu.cn/> (北)